

# 博士学位論文審査要旨

2017年1月7日

論文題目： エマニュエル・レヴィナスと言語の問題

学位申請者： 樋口 雄哉

審査委員：

主 査： 文学研究科 教授 庭田 茂吉

副 査： 阪南大学経済学部 教授 和田 渡

副 査： 文学部 助教 服部 敬弘

要 旨：

本論文は 1950 年代から 1970 年代のレヴィナスの著作を中心に提起し、彼の言語についての思想の諸相を明らかにし、「倫理的」とも称されるレヴィナスの哲学において、言語の問題がどのような位置をしめるかを論じたものである。レヴィナスの言語をめぐる議論の一般的特徴は、発話者のことばが常に他人へと向けられているという事実を重視する点にある。しかも、彼にとって、この事実は哲学において決して二次的経験といったものではない。この言語的事実の根源性の発見によって、レヴィナスの哲学は、存在論を根源的と考えるハイデガーの哲学と決定的に対立する。要するに、誰かに向かって話すという経験は、存在者の存在の問題に回収できない独自の意味をもつのである。それゆえ、問題はこの独自の意味の領域の解明ということになる。

本論文は、「はじめに」、第一章「『存在論』と言語」、第二章「〈同〉と〈他〉の関係の成就としての言語」、第三章「同一化の言語と『近しさ』の言語」、第四章「『言われたこと』と『言うこと』」、そして「おわりに」からなる。第一章では、レヴィナスにおいて言語の問題が初めて明確に提示された「存在論は根源的か」を主に取り上げ、ハイデガーの存在論とは反対に言語の経験のもつ根源性が論じられる。第二章では、『全体性と無限』にしたがって、「同」と「他」の関係として分析される自己と他者の関係におけるさまざまな「言語」や「言説」の解釈から、言語とは他人からの語に先立つ語りかけと、所有物の贈与という仕方での応答という二重の運動である点が指摘される。第三章では、「言語と近しさ」の読解によって、同一化の言語と近しさの言語を区別し、他人との関係において展開される近しさの言語が前者の言語を基礎づけていることが主張される。第四章では、これら二つの言語の区別がさらに「言われたこと」と「言うこと」の区別として論じられ、『存在するとは別の仕方』において、今度は言語が主体の受動的誕生の場として再解釈される。

本論文の意義は、これまで決して多いとは言えない、レヴィナス哲学における言語の問題の究明に取り組み、その哲学的意味を明確にした点にある。この分野の研究を進める上で、今後参照されるべき論文であろう。よって、本論文は博士（哲学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2017年1月7日

論文題目： エマニュエル・レヴィナスと言語の問題

学位申請者： 樋口 雄哉

審査委員：

主 査： 文学研究科                      教授 庭田 茂吉

副 査： 阪南大学経済学部          教授 和田 渡

副 査： 文学部                          助教 服部 敬弘

要 旨：

上記審査委員は、学位申請者樋口雄哉氏に対する総合試験を2017年1月7日午後2時から3時間実施した。

総合審査において、学位申請者は提出された論文の内容および関連事項に関する口頭試問に対して、適切に対応し、論文の意義とその研究水準の高さを示すとともに、主題の背景となる哲学史的理解や現代の哲学的課題についても、広範な専門的知識をもちあわせ、深い教養をそなえていることを証明した。

また、語学試験（フランス語、英語）においても、学位申請者が研究上要求される外国語文献の読解能力を十分に有していることが証明された。

よって、総合試験の結果は合格であると認められる。

# 博士學位論文要旨

論文題目： エマニュエル・レヴィナスと言語の問題

氏 名： 樋口 雄哉

## 要 旨：

本論文の目的は、1950年代から1970年代のレヴィナスの著作を中心に上げ、彼の言語についての思想の諸相を明らかにするとともに、彼の哲学における言語の問題の位置を見定めることである。

レヴィナスは、処女作『フッサール現象学の直観理論』(1930)で、現象学、とりわけフッサールとハイデガーの研究者として出発したが、1930年代半ば頃から彼独自の哲学を構想し始める。1935年に発表された「逃走について」は、彼の哲学が歩むべき方向が具体的に提示された論文で、そこでは、自我が自己の存在、自己の実存から逃れる可能性が問われている。この問題はその後の10年のあいだに深められ、第二次世界大戦後の1947年に出版された第二の著書『実存から実存者へ』で論じ直されることになる。この47年の著作は、「ある (il y a)」や「実詞化 (hypostase)」と呼ばれる出来事の分析を通して、主体が身体において「ここ」へと位置付けられているという事実そのものの経験が、存在を介した存在者との関係とは全く異なることを明らかにし、存在を知解可能性とする経験の領域とは全く別の領域を開く。他方で彼は、この「実詞化」が現在の瞬間そのものであると規定し、自己の存在の他の問題と、時間の移行の問題を一致させる。そうしながら、『実存から実存者へ』のレヴィナスは、時間の移行と、自我と他性の関係の成立が具体的に生起する状況として、他人との関係が分析されるべきであることを示唆している。

そこでこの著作以降、レヴィナスの哲学は、自我と自己自身の存在への関係に回収されない絶対的な他性の問題を遠景に置きつつ、自我と他人との関係の解明に注力することになる。この対他人関係は、『実存から実存者へ』と同じ年に行われた講演「時間と他」では、女性とのエロスの関係と息子との父子関係として扱われていた。だが彼は、1950年からはっきりと、件の対他関係が成立する具体的状況として、他人との「倫理的」関係を提示するようになる。そして、この「倫理的」関係の議論において重要な位置を占めるのが、言語に関する分析である。「倫理」の主題と言語の主題は、50年代以降、最晩年に至るまで、レヴィナスの哲学の主要なテーマであり続けることになる。

レヴィナスの言語についての議論の一般的な特徴は、発話者の言葉が常に他人へと向けられているという事実への注視にある。彼は、存在を介した存在者との関係を媒介的な関係とみなした上で、自我が言葉を宛てるという事実においては、この存在者の関係に収まらない、他なるものとの無媒介的な関係が成立していると考ええる。そして彼はそこから、存在を知解可能性とする意味の領域とは別の領域を析出しようとするのである。本論の狙いは、こうしたレヴィナスの言語についての議論が、時期に応じて肉付けされ、また改変されていく過程を辿ることを通して、彼の言語の議論の射程を明らかにするとともに、彼の「倫理」の思想の解明に寄与することにある。

そこで本論は、言語の議論が具体的に展開され始めた1950年代から、レヴィナスの哲学が一応の完成を見た1970年代までの彼の著作のなかから、四つのテキストを選び、それらを詳細な読解を中心に論述を進めていく。

本論第一章では、レヴィナスが言語の問題に関する彼の見解を初めて明確化すると同時に、以後の著作で中心的な役割を果たすことになる「顔」の概念を初めて世に問うた1951年の論文「存在論は根源的か」中心に扱う。この論文の言う「存在論」は、ハイデガーが『存在と時間』や他の著作で展開した学的営みとしての存在論を指すだけではない。レヴィナスは40年代から、現存在の存在理解をも指して「存在論」と呼んでいた。第一節では、これに注目して、レヴィナスのこの論文の主眼が、人間の実存を存在の理解というひとつの知的作用として解釈したハイデガーに抗し、「理解」に収まらない

い人間の実存の様態を提示することにあるのを明らかにする。第二節では、レヴィナスの問いが、存在理解に帰着しない存在者との関係への問いとして進められるなかで、発話者としての自我と対話者としての他人との関係の分析から、問題の關係が他人との關係のなかに同定されるに至る過程を追う。そこから明らかになるのは、この論文が他人との關係に光を当てるのは、彼が事物の「理解」の本質とみなす、存在へと向かう当の事物の「乗り越え」が、他人へ語りかけるといふ行為にはないとみなされるからだということである。続く第三節では、こうした議論を踏まえながら、レヴィナスの「顔」の概念が、他人への言語的關係との関連においてどのように規定されているかを明らかにする。

第二章では、レヴィナスの主著のひとつ『全体性と無限』(1961年)を取り上げる。まず第一節で、「<同>」と「<他>」の二概念へ目を向けつつこの著作の狙いを探り、問題が、<他>の「絶対性」と、<同>と<他>の「分離」とが維持される両者のあいだの逆説的關係であることを見定める。レヴィナスはこの「絶対性」と「分離」を保証するのは、<同>としての自我の自己同一化の運動であると考えている。そこで、第二節では、自我の自己同一化の運動をレヴィナスの論述に即して分節化しながら、「享樂」「所有」「表象」からなる重層的な自我の実存と、それぞれの契機の役割を解明する。第三節と第四節では、レヴィナスの「無限の觀念」の議論に即して、問題の<同>と<他>の關係に要求される形式的構造を確認した後、彼がこの「無限の觀念」の具体的成立形態とみなす他人との倫理的關係を、「所有」「表象」における対他關係との比較から性格づけ、「無限の觀念」の形式的特徴が倫理的關係のどこに見出されているかを明らかにする。そして、レヴィナスによるこのような倫理的關係の「言語」「言説」としての解釈に目を向け、1961年の著作では他人からの語に先立つ語りかけと、所有物の贈与という形での応答という二重の運動が「言語」と名指されていることを指摘する。

第三章では、1967年の論文「言語と近しさ」の読解を行う。始めにこの論文を『全体性と無限』と第二の主著『存在するとは別の仕方』で、あるいは存在することの彼方で』双方に対して簡単に位置付けたのち、レヴィナスが『存在するとは別の仕方』へ向かって、50年代の言語についての議論をどのように組み立て直していくのかを見る。具体的には、第二節で、『全体性と無限』で保持されていた「所有」と「表象」という二つの対他關係のあいだの區別が捨象され、双方が同一的なものの同一化の運動として捉えられるとともに、この運動が同一的对象を言う「言語」として定義されていることを確認する。この論文によれば、この同一化の「言語」は同一的对象についてのあらゆる経験の条件であり、したがって、人間のあらゆる経験は言語の構造を備えている。だがレヴィナスは、同一化の「言語」は、可能的にであれ現実的にであれ、他人に対して対象を言うことであり、他人との關係の内部で遂行されると考える。そしてこの關係において、他人は同一化の「言語」を条件づけるものであって、この「言語」によって言われるものではない。第三節では、この事実に注目したレヴィナスが、同一化の作用から感性的体験へと遡りつつ、他人との關係を「近しさ」という感性的次元で展開される別の「言語」として解明するのを確認し、二つの言語の差異を明らかにする。

第四章では、1967年の論文で確立された二つの言語の區別が、1974年の著書『存在するとは別の仕方』でどのように肉付けされ、著作全体の課題に関してどのような役割を担うことになるかを明らかにした。第一節では、彼が存在の本質を、<同>としての存在自身の自己差異化と自己同一化の二重の運動に見出すとともに、著作の課題を、この運動からこの運動が前提する<同>と<他>の關係への遡求として設定していることを明確化する。第二節では、「存在と存在者の両意性」の議論の検討を通じて、著作の課題が、存在論的な言語からより根源的な言語への遡求という形、より具体的に言えば、「言われたこと」と相關的な「言うこと」から純粋な「言うこと」そのものへの遡求という形をとって遂行されることを確認する。第三節では、そのようにして獲得される「言うこと」の「言語」は、もはや主体の能動的行為のひとつとしてではなく、主体が絶対的受動性において関わる場所、主体が生起する場、あるいは出来事として提示されていることを明らかにする。このように、1951年の論文で、存在への「乗り越え」を欠いた無媒介的な対他人關係として示された言語は、1974年において、主体の受動的な誕生の場として解釈し直されるのである。

以上の議論の後、本論は最後に、こうしたレヴィナスの「言語」を、レヴィナスに依拠しつつ、レ

ヴィナスとは別の仕方で発展的に解釈する可能性を問うた。レヴィナスが1974年に行き着いた主体にとって絶対的に受動的な「言うこと」の「言語」は、もはや、われわれが間人間的関係のなかに見出す「言語」から、遠く隔たっているのではない。レヴィナスは「言語」の意味を、あまりにも大きく変質させてしまったのではない。だが、そうだとすれば、「言うこと」の「言語」を、間人間的関係に限定しておくことは、もはやできないのではない。たしかにレヴィナスは、絶対的な他性との関係が、あくまでも他人との関係（と、他人との関係を起点にした神との関係）においてしか成立しないと考えている。だが、もし、間人間的倫理の特権視がレヴィナスの哲学の内部で正当化されないとすれば、われわれは彼の哲学そのものに依拠しつつ、彼とは別の仕方、他なるものに対するわれわれの責任を論じることができるかもしれない。